

琉球大学学術リポジトリ

琉球宮古島野原方言の間接的エヴィデンシャルティ

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2013-05-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: かりまた, しげひさ メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/26041

琉球宮古島野原方言の間接的エヴィデンシャルティ

かりまた しげひさ

1. はじめに目的と方法

琉球諸語は、北琉球諸語と南琉球諸語のふたつに区分される。本稿の対象となる宮古島市上野字野原方言の属する宮古語は、北琉球諸語とだけでなく、おなじ南琉球諸語に属する八重山語とも与那国語とも音韻的にも文法的にもことなる特徴をもつ。本発表では野原方言のアスペクト・テンス・エビデンシャルティ（以下ATE）について、とくに、客体変化動詞uksを語彙的資源にした形式が運動動詞、存在動詞、形容詞、述語名詞にあらわれて間接確認をあらわすことをみていく¹。適宜、北琉球諸語と比較して野原方言の特徴をのべる。

使用した用例は、科学研究費『方言における述語構造の類型論的研究』（研究代表者・工藤真由美）で作成された調査票を使用してえられたものである。方言資料は音韻的に表記する。標準語訳をつけるが、標準語の形式と意味にずれれるものは、カタカナで表記した擬似的な標準語訳を付す。卓立的な意味をあらわす焦点化助辞duは訳さない。形態素の切れ目にハイフンを付すが、対格助辞ju（を）と主題・対比強調のとりたて助辞ja（は）は名詞語末の短母音に後接するとき、相互同化²や進行同化がおきて融合して分割できないのでハイフンを付さない

¹ 宮古島市上野字野原集落は宮古島のほぼ中央に位置する、サトウキビ生産を中心にした農村。人口は約650人。野原方言の情報提供者N.Y.氏（昭18年生、男性）は、18歳まで旧上野村野原で生活し、18歳から現在まで沖縄島に在住。調査は2011年10月7日から2012年7月27日までの期間に計21回行った。

² naka・ju > nako:（中を）、saki・ju > sakju:（酒を）。pstu・ja > pstō:（人は）、ami・ja > amja:（雨は）など。

2. 北琉球諸語のATE

かりまた(2004)で記述された沖縄南部語安慶名方言、工藤他(2007)で記述された沖縄北部語与論方言、島袋他(2009)で記述された沖縄北部語今帰仁方言など、北琉球諸語のATE体系は、si中止形に有情物主体の存在動詞uNオルを語彙的資源にした進行相形式あるいは直接確認形式と、site中止形にuNを語彙的資源にした継続相形式と、uNをふくまない完成相形式によって構成される。進行相あるいは直接確認の形式が西日本方言のsijoruに相当する形式であり、継続相が西日本方言のsitoruに相当する形式であることから、工藤他(2007)は、与論方言が西日本方言の3項対立型の変種であるとのべている。北琉球諸語の今帰仁方言にも安慶名方言にも与論方言にも直接確認を明示する形式のほかに、無情物主体の存在動詞?aNアルを語彙的資源にした間接確認を明示する形式がある。この形式は、標準語のsitearuに相当する。しかし、安慶名方言、今帰仁方言のばあい、この形式をとる動詞に制限がないだけでなく、形容詞でも述語名詞でもこの形式をとることができ、間接確認のほかに痕跡、経験などのパーフェクト、反実仮想などのムード的な意味をあらわすことなどが標準語のsitearuとおおきくことなる。?aNを語彙的資源にする安慶名方言、今帰仁方言の間接確認をあらわす形式には、実行法の形式が確認できない。

安慶名方言の完成相非過去suN³スルは、uNをふくむ西日本方言の進行相sijoruに相当するが、進行の意味をうしない、完成相に移行している。過去形にはuNをふくむsutaNシタ⁴とuNをふくまないsaNシタ⁵がある。sutaNは西日本方言の進行相過去sijottaに相当するが、進行の意味をあらわさず直接確認を

³ suN < sjuN < si · uN。

⁴ sutaN < sjutaN < si · utaN。この方言の話者は、直接確認を明示するこの形式をシヨッタと訳して使用するが、西日本方言の「しよった」とは文法的な意味がことなる。

⁵ saN < sicjaN < sici · ?aN < site · ?aN

⁶ 今帰仁方言 suN は部分的に進行の意味を保持し、与論方言は進行の意味を有する sjui と完成相的な意味を有する sjuN があって北琉球諸語の進行相は一様ではない。

あらわす専用形式に移行している⁶。完成相の叙述法非過去はuNをふくむが、命令法se:シロ、勧誘法sa:シヨウはuNをふくまない。継続相so:N⁷シテイルは形のうえでは西日本方言のsitoruに相当するが、主体変化動詞⁸が変化結果の継続をあらわすなど、文法的な意味の面では標準語のsiteiruに対応する。

表1 安慶名のATE

	中立的形式	エヴィデンシャリティー形式	
		直接確認	間接確認
完成相	?ucjuN オク	——	?ucje:N オイタンダ ?ucje:te:N オイテアッタダ
	?ucjaN オイタ	?ucjutaN オイタ	——
継続相	?ucjo:N オイテイル	——	?ucjo:te:N オイテテアッタダ
	?ucjo:taN オイテイタ	——	——
客体結果	?ucje:N オイテアル	——	——
	?ucje:taN オイテアッタ	——	——

表2 今帰仁方言のATE

	中立的形式	エヴィデンシャリティー	
		直接確認	間接確認
完成	?ucjuN オク	——	?ucjeN オイタンダ ?ucje:teN オイテアッタダ
	?ucjaN オイタ	?ucju:taN オイタ	——
継続	?ucjuN オイテイル	——	?ucjuteN オイテテアッタダ ?ucjuiteN オイテテアッタダ
	?ucjutaN オイテイタ	?ucjuitaN オイテイヨッタ	——
客体結果	?ucjeN オイテアル	——	——
	?ucje:taN オイテアッタ	——	——

⁷ 動詞を運動動詞と存在動詞にわける運動動詞を主体動作客体変化動詞、主体動作動詞、主体変化動詞にわける。動詞の語彙 = 文法的な分類は、工藤真由美編 (2004) による。

八重山語石垣方言のATE体系を以下の第5表にした。siari中止形をアスペクト形式、エヴィデンシャリティー形式の中核にする直接確認を明示する形式がまだ確認できていない。この点は野原方言ににる。一方、間接確認を明示する形式があるが、無情物主体の存在動詞aN（有る）を語彙的資源にしている点は、北琉球諸語ににる。石垣方言をふくむ八重山語のATE体系についての詳細な記述研究が必要である。

第3表 石垣方言のATE体系

	中立の型式	エヴィデンシャリティー 型式	
		直接確認	間接確認
完成相	tsikuN オク	——	tsike:N オイタンダ
	tsikuda オイタ	——	tsike:da オイテテッタ
継続相	tsikiN オイテイル	——	——
	tsiki uda オイテイタ	——	tsiki ure:N オイテイタンダ
結果相	tsike:N オイテアル	——	——
	tsike:da オイテアッタ	——	tsike:re:N オイテアッタ

3. 野原方言のATE

野原方言は、siari中止形に有情物主体の存在動詞u:オルを語彙的資源にした継続相si: u:とu:をふくまない完成相ssとで構成される2項対立型のアスペクト・テンス体系をなす。完成相非過去の語形は、古代日本語のsi中止形もしくはsuru連体形に対応し⁹、過去形はsitariもしくはsitaruに対応する¹⁰。非過去にも過去にもu:はふくまれず、北琉球諸語にあった直接確認を明示する形式が野原方言にはない。間接確認を明示する形式は存在する。

⁹ 古代日本語の強変化h語幹動詞をのぞく強変化動詞、弱変化動詞、混合変化動詞に対応する野原方言の叙述法断定の非過去形はsi連用形に対応する。

¹⁰ 野原方言をふくむ宮古諸語の強変化動詞の過去形はnumta: (飲んだ)、tubzta: (飛んだ)、kugzta: (漕いだ)、kaksta: (書いた)、mutsta: (持った)、tuzta: (取った)、utusta: (落としたり) などにもみるように、撥音便、イ音便、促音便がなく、音便のある日本語諸方言、北琉球諸語とこなる。音便についてはかりまた(2012)でのべた。

- 1) atsa m:na-si: upo:-nu is-su utus.
 (明日 皆で 大きい 石を 落とす。)
- 2) tuz-nu pingi-n jo:n pagz-zu ftts.
 (鶏が 逃げない ように 脚を 縛る。)
- 3) jukja: atsa-n naz-tska: kja:r-i.
 (雪は 明日に なったら 消え-る。)
- 4) ksnu jarabi-nu-du fniz-zu utus-ta:.
 (昨日 子ども-ガ 蜜柑を 落とした。)
- 5) ksno: itsf-tu asp-sta:.
 (昨日は いとこ-と 遊んだ。)
- 6) ksnu:-du ja:-nu kingjo-nu sn-ta:.
 (昨日 家の 金魚が 死んだ。)

継続相si: u:にu:オルをふくむ点は、西日本方言に在るが、主体動作動詞と主体動作動詞が動作継続をあらわし、主体変化動詞が変化結果の継続をあらわす点は、意味的には標準語のそれになる。一方、siari中止形を中核にする野原方言の継続相は、site中止形を中核にする日本語諸方言とも北琉球諸語ともことなる。

- 7) jarabi-nu-du pari-nu nako: azk-i: u:.
 (子ども-ガ 畑の 中を 歩いて いる。)
- 8) jarabi-nu-du fniz-zu utus-i: u:.
 (子どもが 蜜柑を 落として いる。)
- 9) kingjo-nu-du sn-i: u:.
 (金魚-ガ 死んで いる。)

第4表 野原方言のATE体系

	中立的型式	エヴィデンシャルティー型式	
		直接確認	間接確認
完成相	utsk オク	—	utski: uks オイタンダ
	utsksta: オイタ	—	
継続相	utski: u: オイテイル	—	
	utski: urta: オイテイタ	—	
結果相	utski: uks オイテアル	—	
	utski: uksta: オイテアッタ	—	

継続相は、設定時点以前に実現した運動（動作、変化）がひきつづき効力や経験として設定時点にあらわれるパーフェクトをあらわすこともできる。非過去si: u:は発話時点＝設定時点にかかわる現在パーフェクトをあらわし、過去si: urta:は過去の設定時点にかかわる過去パーフェクトをあらわす。

10) unu sakju:-ba: baja: ikkai-ja num-i: u:.

（その 酒-ヲ 私-は 一度-は 飲んで いる。）

11) unu aiskuri:mo: ikkai-du tuki: u:.

（この アイスクリーム-は 一度 融けて いる。）融けた味や食感。

12) bjo:i-nkai tsk-sta: tukja-n-na uja: sanzippunmai-n-du sn-i: urta:.

（病院-に 着いた とき-には 父-は 30分前-ニ 死んで いた。）

動詞siari中止形に客体変化動詞uksオクを語彙的資源にしたsi: uksにはつぎのみつつの用法がある。（1）限界に到達した動作、変化の結果的な状態の実現をあらわす。（2）客体変化動詞が非過去と過去の形をとって、主体のはたらきかけによる客体変化の結果的な状態が発話時点に継続していることをあらわす。（3）意志動詞、無意志動詞の別なく、すべての運動動詞が非過去の形をとり、記録・痕跡などの間接証拠にもとづいて、先行時点に実現したひとま

とまりの出来事の間接確認をあらわす。

3.1 結果的な状態の実現

未来時に動作、変化が実現したあとの結果的な状態が実現していることをあらわす。意志動詞、無意志動詞の制限なくこの形式をとる。主語の人称制限もない。意志動詞のばあい、意図性=もくろみ性をとまない、命令形や勧誘形でもあらわれる。意志動詞のばあい、標準語のsiteoku、安慶名方言のso:cjuNシテオクになるが、無意志動詞の用法は標準語にも安慶名方言にもみられない

13) atsa-nu stumuti-gamja: amja: fri:du uk-s padz.

(明日の 朝-マデニ-は 雨-は 降りオワッテイル ダロウ。)

14) ba-ga ik-s kja:ja madu: aki: uks padz.

(私-が 行くまで-には 窓-を 開ケテ オクダロウ。)

15) cja:nti: gokiro azk-i: uk-i.

(ちゃんと 五キロ 歩いて おけ。)

16) saks-n gakkō:-nkai ik-i uk-i.

(先-に 学校-に 行って おけ。)

17) atu-n-na num-ain-siba nnama gju:nju:-ju num-i uk-a.

(後-デ-は 飲めない-から いま 牛乳-を 飲んで おこう。)

3.2 客体結果

客体変化動詞のsi: uksは、客体結果をあらわすとき、テンス対立があり、非過去形と過去形がある。非過去形は発話時現在の客体結果の継続を、過去形は過去の客体結果の継続をあらわす。主語の人称制限がない。客体結果の継続をあらわすのは標準語のsitearuになるが、動作主体を主語に明示する点は標準語のsitearuとはことなる。

18) uja-ga-du fniz-zu utus-i: uk-s.

(父-ガ 蜜柑-を 落として ある¹¹。) 落とされた蜜柑がある。

19) anna-ga-du ke:kju: kis-i: uk-s.

(母-ガ ケーキ-を 切って ある。)

20) jarabi-nukja:n fi:tti dus-nu-du fniz-zu-ba: utus-i: uk-sta:.

(子ども-たちに やろう-と 友人-ガ 蜜柑-ヲ 落として あった。)

3.3 間接確認

運動動詞（客体変化動詞、主体動作動詞、主体変化動詞）のsi: uksの非過去は、発話時点に存在した痕跡や効力、記録など、動作や変化の成立後にあらわれる偶然的な結果=間接証拠にもとづいて、それ以前の出来事時点に実現したひとまとまりの出来事の間接確認をあらわす。人称制限があり、一人称を主語にすることができない。

21) uja: kju:mai fniz-zu utus-i: uk-s.

(父-は 今日-も 蜜柑-を 落としたんだ。)

22) ami-nu-du fr-i: uk-s.

(雨-ガ 降ったんだ。)

23) kunu jarabja: mata pari-nu nako:du azk-i: uk-s.

(この 子ども-は また 畑-の 中-ヲ 歩いて いる。)

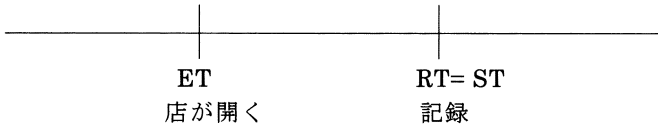
24) unu psto: kuma-n-du sn-i: uk-s.

(その 人-は ここ-デ 死んだんだ。)

25) tsno: zju:zi-n-du ak-i: uk-s.

(昨日-は 10時-ニ 開いたんだ。)

¹¹ 日本語に直訳すると「落としておく」となるが、この形式があらわすのは未来の出来事ではなく、発話時に継続している変化した客体の結果的な状態である。



3.1.1 過去の間接確認

過去の設定時点に存在した間接証拠にもとづき、それ以前の出来事時点に実現したひとまとまりの出来事の間接確認も非過去形 *si: uks* があらかず。人称制限があり、一人称を主語にすることができない。間接確認をあらわす形式にテンス形式の分化がみられず、発話時点の間接証拠にもとづく間接確認とは動詞形式で区別できないが、過去の出来事時点をしめす時間名詞 *ksnu* (昨日)、*bututuz* (一昨日) や時間状況語などによって区別される。発話時の間接証拠にもとづく間接確認の形式 *se:N* と過去の設定時点の間接証拠にもとづく間接確認の形式 *se:te:N* との区別のある安慶名方言とことなる。

26) *uja-ga-du ksnu fniz-zu utus-i: uk-s.*

(父-ガ 昨日 蜜柑-を 落としたんだ。)

27) *bututuz tarama: upuami-nu-du fr-i: uk-s.*

(一昨日 多良間-は 大雨-ガ 降ったんだ。)

28) *kanu ffa-nu-du pari-nu nako: azk-i: uk-s.*

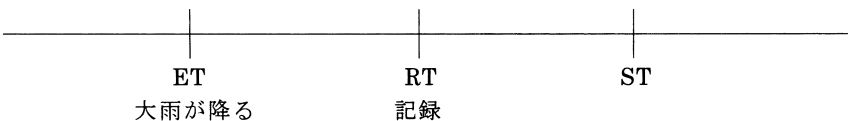
(あの 子-ガ 畑-の 中-を 歩いたんだ。)

29) *mado-nu-du aki: uk-s.*

(窓-ガ 開いたんだ。)

30) *unu psto: kama-n-du sn-i: uk-s-ja:.*

(その 人-は むこう-テ 死んだんだな。)



反実仮想

si: uksを述語にもつ文は、現実には実現しなかった、事実に反する出来事を想定し、それが実現していれば実現した結果を想像してのべる反実仮想もあらかわす。間接確認をあらわす形式が反実仮想をあらわすという認識的モードの相関性がみられる。

31) vva-ga azz-adaka: fniz-zu utus-i:du uk-s.

(君-が 言わなければ 蜜柑-を 落として いた。)

32) ba-ga azz-adaka: nnja pi:tcja-si: pari-nu nako: azk-i: uk-s.

(私-が 言わなければ もう 少-し-で 畑-の 中-を 歩いて いた。)

33) madu: simi-daka: umat-tsa kja:r-i-du uk-s.

(窓-を 閉めなければ 火は 消えて いた。)

存在動詞

有情物主体の存在動詞u:、無情物主体の存在動詞a:もsi: uksの形式をとって、1) 発話時点の間接証拠にもとづくそれ以前の一時的な存在の間接確認、2) 過去の設定時点の間接証拠にもとづくそれ以前の一時的な存在の間接確認をあらわす。人称制限があり、有情物主体のuri: uksも一人称を主語にできない。

34) urja: sina-n-du ur-i: uk-s.

(そいつは 中国-に いたんだ。) 記録を見ての間接確認。

35) sinsi:-ja kuma-n-du ur-i: uk-s.

(先生-は ここ-に いたんだ。) タバコの吸い殻を見ての間接確認。

36) uma-n-na gumi-nu-du ar-i: uk-s.

(そこ-には ゴミ-ガ あったんだ。) 汚れた跡を見ての間接確認。

uri: uks、ari: uksは、過去の設定時点に存在した記録・痕跡などの間接証拠をもとにそれ以前の人や物の一時的な存在を間接的に確認する。

37) ba-ga ja:nkai mudu-zta: tukja-n-na pstu-nu-du ur-i: uk-s.
(私-が 家-に 戻った とき-には 人-ガ いたんだ。)

38) ba-ga k-sta: tukja-n-na genka-n-du gumi-nu ar-i: uk-s.
(私-が 来た とき-には 玄関-ニ ゴミ-が あったんだ。)

uri: uks、ari: uksを述語にもつ文は反実仮想もあらず。

39) unu pstu-n azzai-daka: jusarabi-gami gakkō:-n-du uri: uks.
(その 人-に 言われなければ 夕方-まで 学校-ニ 居た。)

40) anna-ga katadzki-daka: urja: jusarabi-gami uma-n-du ari: uks.
(母-が 片づけなければ それは 夕方-まで そこ-ニ あった。)

形容詞、述語名詞

間接確認をあらわす形式は形容詞にも述語名詞にもあらわれる。uksを語彙的資源にする形式は間接確認をあらわすモダリティー形式に移行している。形容詞の間接確認をあらわす形式は、siari中止形のtakakari:にuksをくみあわせる。述語名詞は、コピュラja:デアルのsiari中止形jari:にuksをくみあわせる。このばあいも過去形を確認できていない。

41) kuma-n a:-ta: ki:-ja takaf-du ar-i: uk-s.
(ここに あった 木-は 高かった。)

42) kanu pstō: bakaka: tukja-n-na sinsi:-du jar-i: uk-s.
(あの 人-は 若い とき-には 先生だった。)

形容詞と述語名詞の間接確認を表わす形式を述語にもつ文も反実仮想もあ
わす。

43) nnja pi:tɕja satto: zzu:kiba dzo:kar-i: uk-s.

(もう 少し 砂糖を入れておけば よかった。)

44) anka:nu kair-adaka: iciban-na banta-du jar-i: uk-s.

(アンカーが 転ばなければ 一番は 私たち だった。)

まとめ

他動詞uksを文法化させて間接確認、推論を明示する形式を有することは、
他の琉球諸語にはみられない宮古語野原方言のATE体系の特徴である。

siari中止形

北琉球諸語の継続相や結果相はsite中止形が中核をなすが⁸、野原方言の継続
相、結果相の形式の中核をなすsiari中止形は、si中止形にari(有り)の後接し
た形式である。野原方言の継続相、間接確認を明示する形式の中核をなすsiari
中止形は、一見すると、si中止形のようにもみえるが¹²、si中止形に存在動詞
ariがくみあわさって融合したものであるとかがえる。

野原方言のsiari中止形と類似する形式がおなじ南琉球諸語の八重山語石垣方
言、北琉球諸語の沖縄島北部語の伊平屋島方言、伊是名島方言に確認できる。
石垣方言、伊平屋島方言、伊是名島方言のsiari中止形は、あわせ文の述語にな
るだけでなく、野原方言のsiari中止形と同様に継続相などの形づくりの要素に
なることができ、生産性がある。

¹² si中止形に対応していれば、強変化k語幹動詞は、kaks(書き)、g語幹動詞はkugz(漕ぎ)、m語幹動詞はjum(読み)となるはずだが、実際には、kaki、kugi、jumi:であり、si中止形に対応しない。

1531年に編纂された古歌謡集『おもろさうし』にもsiari中止形が確認できる。『おもろさうし』では「～やり」の形でみられる。高橋俊三（1982）は「～やり」の形を「連用形+やり」の形で完了の意味を表わす。用例は中止法のみである。」と指摘している。沖縄島南部語の安慶名方言や首里方言にもsiari中止形が確認できる。首里方言のsiari中止形は、sai¹³とsa:niの形であらわれ、前者が古形であり、いずれも先行後続の関係をあらわす。

45) (通巻176巻) 「とよむ 大きみや もゝしま そろへやり みおやせ。」(訳: 名高い大君は百島を揃えて差し上げよ。)

46) (通巻632巻) 「いと ぬきやり、 なわ ぬきやり、」(訳: 糸を貫いて、縄を貫いて)

47) 第5表 各方言のsiari中止形

	書いて	遊んで	起きて	降りて	洗って	似て
首里方言	katʃa:i	?afiba:i	?ukija:i	?urija:i	?araja:i	nija:i
伊平屋方言	katʃe:	?afine:	?ukije:	?urije:	?araje:	nije:
平良方言	kaki:	aspi:	uki:	uri:	arai:	ni:
石垣方言	kaki:	asibi:	uke:	ure:	araja:	nija:

参考文献

- かりまたしげひさ (2012a) 「宮古語野原方言の動詞のアスペクト・テンス・ムード体系の概要」『琉球アジア社会文化研究』第15号。
- かりまたしげひさ (2012b) 「宮古語の動詞活用－代表形、否定形、過去形、中止形－」『消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究－南琉球宮古方言調査報告書』、国立国語研究所。

¹³ sai < sjai < sijari < *si・ari。これらの方言では tui < *tori (鳥)、nui < *nori (糊) のように *i に先行する *r が規則的に音脱落する

- かりまたしげひさ（2004）「沖縄県具志川市安慶名方言の動詞のアスペクトと
テンス」『日本語のアスペクト・テンス・ムード体系－標準語研究を超えて』
工藤真由美編、ひつじ書房。
- 工藤真由美・仲間恵子・八亀裕美（2007）「与論方言動詞のアスペクト・テ
ンス・エヴィデンシャルティー」『国語と国文学』84巻3号。
- 工藤真由美・高江洲頼子・八亀裕美（2007）「首里方言のアスペクト・テ
ンス・エヴィデンシャルティー」『大阪大学文学研究科紀要』第47集。
- 工藤真由美編（2004）『日本語のアスペクト・テンス・ムード体系－標準語研
究を超えて－』ひつじ書房
- 島袋幸子・かりまたしげひさ（2009）「沖縄今帰仁村謝名方言のアスペクト・
テンス・ムード」『日本東洋文化論集』第15号
- 高橋俊三（1991）『おもろさうしの動詞の研究』武蔵野書院